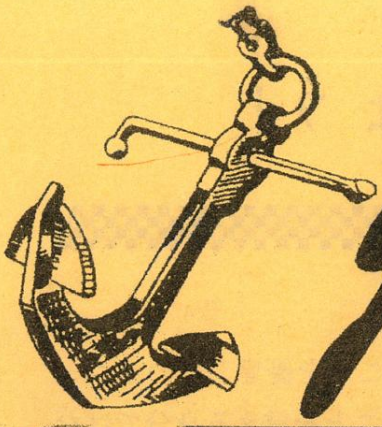


Anchor

NO.22

アンカー

「賢い者は悟るであろう」ダニエル12:10—P1

アンカー誌への質問と答え—P5

ダニエル12章の研究—マリアン・ベリーP20

サインズ・オブ・ザ・タイムズ—P27
(時のしるし)

み言葉の曲解—P35

「わたしは、第三天使の使命が上のほうを指さして、失望した人々に天の聖所の至聖所への道を示しているのを見た。信仰によって彼らが至聖所にはいるときに、彼らはイエスを見出して、新たな希望と喜びを味わうのである」[illegible]代文集415

「賢い者は悟るでしょう」

ダニエル１２：１０

現代訳聖書は、改悪された写本から翻訳されたものであることを憂慮しているニュージーランドの一平信徒、エバン・サドラーは、そのようなことを言える身分ではないとある牧師から挑戦を受けた。「あなたはどれくらいの言語を知っているのですか。」と牧師は聞いた。サドラーさんは、ユーモアをもって即座に答えた:「二つの言語です。――ニュージーランド語とオーストラリア語です。」

このこっけいな返答に動ぜず、牧師は彼のポイントを押して言った:「ギリシア語やヘブル語を知らないでいて、どうしてあなたは聖書翻訳に関して専門家らしく言えるんですかね」。サドラーさんは問い返した。「あなたはギリシア語をご存じですか。」「もちろんですよ。」「それでは、恐れ入りますが新国際訳聖書（ＮＩＶ）のもとになっているギリシア語の聖書で、マタイ１８：１１をどう読むかを教えてください。」「それはお安いご用。」と快く引き受けた。

しかし、自分のギリシア語聖書を開いて戸惑いと驚きで叫んだ。「おやっ、マタイ１８:１１はないよ！どこに消えたんだ！」１０節と１２節はあるのに、１１節は全く削られているのである。サドラーは、静かに「先生、聖書から聖句が削除されてしまっては、あなたのギリシア語の知識は何の役に立ちますかね。」

聖書をヘブル語、ギリシア語で読めるということはすばらしいが、それが真理の認識につながるとは必ずしも言えるわけではない。学歴を持つ者が真理を理解するのに素早いということはない。人間の細胞は天からの真理を認識することはできない。

> 「そして、それを神は、御霊によってわたしたちに啓示して下さったのである。御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである。いったい、人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれが知っていようか。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない。ところが、わたしたちが受けたのは、この世の霊ではなく、神からの霊である。それによって、神から賜わった恵みを悟るためである。」コリント人への第一の手紙2:10～12。

御霊によって啓示された真理であるから、聖霊によって悟ることのできるものである。

イエスに目をあけてもらった盲人は、イエスが神から遣わされた方であることを体験的知識によって確信していた。しかし、あれほどの神性の証拠を目の前にしながら、パリサイ人たちは真理を認識できなかった。高等批評ばかりを楽しんでいた。「神に栄光を帰するがよい。」とまるで第一天使の使命に精通しているかのように盲人に言った。学歴のない盲人は「私の目をあけてくださったのに、その方がどこから来たか、ご存じないとは、不思議千万です。」と驚いて言った。彼は真理認識の原則を明言している。「神は罪人の言うことはお聞き入れになりませんが、神を敬いそのみこころを行う人の言うことは、聞きいれてくださいます。」ヨハネ９：３０～３２。

真理の光に歩む者は、さらに光が与えられるのである。「そこでいま彼にもっと高い啓示が与えられた。」２希望２７０。

「真理を感知し、認識することは、頭よりも心の問題であるとイエスは言われた。真理は魂に受け入れられねばならない。それは意思の服従を要求する。もし真理を理性だけでなっとくすることができたら、それを受け入れるのに誇りは邪魔にならないであろう。しかし真理は、心のうちにおける恵みの働きを通して受け入れられるのである。そして、その受け入れは、神の御霊によって示されるいっさいの罪を放棄することにかかっている。真理を受け入れるように心が開かれ、真理の原則に反するいっさいの習慣と行為を良心的にやめるのでなければ、人はどんなに真理の知識を得ることのできる恵まれた立場にあっても、それは何にも役に立たない。神のみこころを知り、これを行いたいというまじめな願いをもって神に屈伏する人々に、真理は彼らを救う神の力として示される。」２希望２３８。

こういう人々は、

「神のために語る人と、ただ自分の考えで語る人とを区別することができる。……真の教師と欺瞞者とを区別することができる。」同。

「真理を知ってこれに従いたいとの望みをもって聖書を祈りのうちに研究する者はだれでも、神からの光を受ける（ヨハネ 7:17 引用）。」同２４３。

真理の認識を妨げるもう一つの原因は、人間に、指導者に頼ることである。

「今日の時代を風靡（ふうび）している精神は、懐疑と背信である。すなわち真理の知識があ

る故に啓蒙を装う精神はあるが、現実は盲目的な憶測でしかない。神の明確な言葉と御霊の証に反する精神が存在する。神の啓示された知恵よりも、単に人間の理性を偶像視し、高める精神がある。

責任ある立場の人たちの中で、聖書の真理、または御霊の証よりも、数人の思い上がった、いわゆる学者の意見が信頼されるべきだと考えている人たちがいる。パウロやペテロ、あるいはヨハネのような信仰は古臭くて、現代には不適切であると考えられている。それは不合理かつ不可解なもので、知的な頭脳の持ち主にはふさわしくないと言明されている。

これらの人々はわが民を苦しめるハザエルとなることを、わたしは示された。彼らは書かれたみ言葉よりも賢い者とされる。人間の判断は神の神秘を理解できないという理由で、神のみ言葉の真理そのものに対する不信がどの地域にも、社会のどの階級にも見られる。それが我々の大部分の学校で教えられ、託児所で教えられている。あなたがどこへ行っても、宗教の衣を着た暗黒の霊に直面するであろう。」５Ｔ７９。

「真理の言葉が語られると、人々はめったに『これは本当だろうか』とたずねないで『それは誰から支持されているだろうか』とたずねる。大衆は、それを受け入れる人の数で評価する。『学者や宗教界の指導者たちの中には信じている者があるだろうか』という質問が今でも聞かれる。キリストの時代と同じように、今日も人々は真の信心に対して好意を示さない。彼らはあいかわらず永遠の富をなおざりにして、地上の幸福を熱心に求めている。多数の人たちがそれを受け入れようとしないとか、世の偉い人たちや宗教界の指導者たちさえそれを受け入れないということは、真理に反対する論拠とはならない。」２希望２４４。

「初期におけると同様に、現代に対して特別に与えられた真理は、教会の権威者のところに見いだされるのではない。それは、これといった学識も知恵もないけれども、神のみ言葉を信じる男女のところにあるのである。」キリストの実物教訓５６。

「サタンはいつも、神の代わりに人間に注意を向けさせようと努力している。彼は、人々が自分で聖書を探って自分の義務を学ばないで、監督や牧師や神学者を案内者とするように導く。そうするときに、サタンはこれらの指導者たちの心を支配することによって、大衆を意のままに感化することができるのである。」大争闘下３６１。

マインド・コントロールは、特に宗教団体では安易になされている。おそろしいことである。どの宗教団体でもそうである。オウム教やデヴィディアン教団、ガイアナで900人が集団自殺した、ジム・ジョーンズの教団ばかりではない。巨大集団の最たるものはローマ・カトリックである。真の教会であると自負しているセブンスデー・アドベンチストも例外ではあり得ない。 セブンスデー・アドベンチストの大衆がどれほどマインド(心)が操作されて、感化されていたかは、最後の嵐、テストで分かることであろう。(大争闘下３７８)。

最後の大争闘は、マインド(心)の大争闘なのである。今日ほど「油断することなく、あなたの心を守れ」と言われた警告に耳を傾けなければならない時代はないと思う。なぜなら、「悪魔は自分の時が短いのを知り激しい怒りをもって」「選民をも惑わそう」として、「ほえたけるししのように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている」からである。この霊界の働きは現実である。

「神のみかたちにかたどってつくられた人間のひとりびとりに、創造主の能力に近い能力――個性、すなわち、思考し行動する能力がさずけられている。... ただ単に他人の思想を反映する者とならないで自ら思考する者」(教育６)となるようにしたい。

「どんな人間でも自分の精神や意思を他人の自由に任せ、無抵抗な機械となることは神のみ旨ではない。... 人間は神にたより、神より与えられた人間の威厳をもっていかなる人間にも支配されず、神によって支配されるべきである。
神は人間をご自分と直接的関係におこうとお望みになっている。」

ミニストリー２１９。

「主の恵みを味わい知れ」ということは、体験的、個人的知識である。

残念なことに大衆の望む思考パターンはどんなものであろうか。

「キリストについての経験的知識をもっていない幾千の者は、力のない形だけの敬虔さを受け入れるようになる。そのような宗教こそ大衆が望むところのものなのである。」大争闘下３２３。

個性のある信徒になろう。我々のために十字架で死なれたキリストの僕とならないのなら、何者かの奴隷になるであろう。

？？？？　質問と答え　！！！！

質問:

最近のアンカーは、時を定めたり、時に重点をおいて興奮をあおっているのではないですか。

ダニエル書１２章の三つのタイムライン（時刻表）によって再臨の時を設定し、時をテストとすることは、狂信、あるいは異端と聞いています。明らかに聖書と証しの書に反する教えではないでしょうか。ダニエル書１２章は、もうすでに過去に起こったことを繰り返して書いているのではないでしょうか。

だからダニエル１２章のひと時とふた時と半時（１２６０日）、１２９０日、１３３５日はダニエル書の他の預言と同じように、１日＝１年と解釈すべきではないでしょうか。

「第三天使の使命は、時に重点をおくものではない。... 時によって強化される必要がない」（初代文集 156）と書いてありますから預言の時、預言の期間に関する研究は重要でないと思うのですが... 。

これから起こる出来事を熟知していたとしても、それが私たちを救うことはできません。私が完全に自我に死に、キリストのものとなることによってしか、最後のかん難を突破する備えはできないと思います。

私たちの目はサタンの策略を暴くことにではなく、キリストの愛にもっと目を注ぐ必要があるのではないでしょうか。

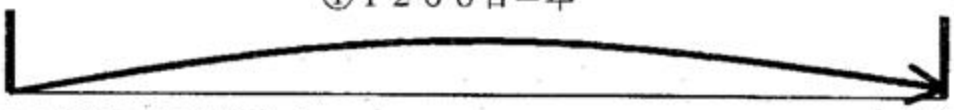
答え:

上記の質問が出るのは当然だと思います。つい最近まで私もそう考えていました。ある聖書研究で一姉妹が、ダニエル１２章の数字、「ひと時とふた時と半時」すなわち、１２６０日、１２９０日、１３３５日はどういう意味があるのかと聞いてきました。資料をもう一度調べて、従来の考えで答えました。

１２６０日＝年は、５３８年から１７９８年までの中世時代の迫害期間、１２９０日＝年は、フランク国王、クロービスがカトリックに改宗した時、５０８年から１

７９８年まで、１３３５日＝年は５０８年から再臨運動の開始までだと説明しました。

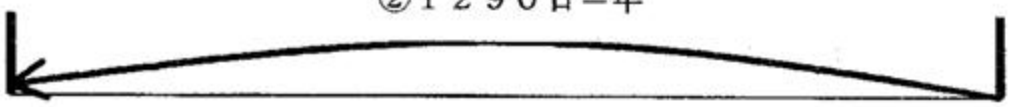
①１２６０日＝年



５３８年法王至上権確立　　１７９８年 法王権失墜

①は過去の迫害期間、ダニエル7:25と同じ

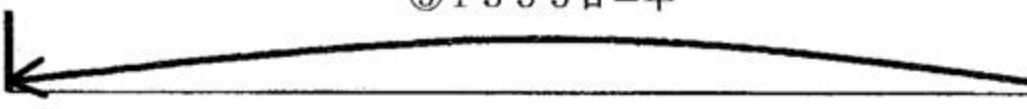
②１２９０日＝年



５０８年フランク王、カトリックに改宗　　１７９８年

②は、「もし１２６０年と１２９０年とが同じ１７９８年に終るものと考えると、１２９０年の始まりは５０８年となる。」と推測した。(伊藤繁美：ダニエル書研究１５９)。
しかし、その時、「常供が取り除かれ、荒らす憎むべきものが立てられ」たでしょうか。それは、５３８年になされたはずです。

③１３３５日＝年



５０８年　　１８４３年

③は、「もし１３３５年が１２９０年の起算点である５０８年から始まるとすると１８４３年になる。」と推測した。(伊藤、160)。

しかし、あやふやな推測が多くて自分自身どうも納得がいきませんでした。
村上良夫先生の説明を見てみましょう：
「ですから、その時(クロービスがカトリックに改宗した５０８年)から数えはじめるとちょうど１２９０日になります。そして１３３５というのは再臨運動の開始までではないかと。こんなふうにあれこれ考えて当てはめようとするわけですが、しかし、１２９０日の終わりを示す出来事には触れられていませんし、１３３５日にいたっては始まりの出来事も終わりの出来事も言及されていませんので、確かなことはわからないと言うのが正直なところです。」(ダニエル書講義２２２)。

私は１８４４年以後は、もう預言の時というのはないとの既成観念を持っていましたので、ダニエル１２章の研究には興味はありませんでした。しかし、聖書と証しの書を研究してみると、自分はなんと盲目であったか、自分は伝統、従来の、一般的聖書解釈にとどまっていた弟子たち、１８００年代の再臨信徒と同じ過ちのとりこになっていたことに気づきました。

質問をいくつかに分けて考えてみましょう:

質問１．ダニエル書１２章は、未来に適用すべきものではなく、もうすでに過去に起こったことを繰り返して述べているのではないか。

このことについては、アンカー２１号に説明されていますがもう一度簡単に繰り返します。ダニエル１２章は、過去のことを言っているのか、それとも未来のことを言っているのかを判断することが先決問題です。

過去のこととするなら、預言者の言葉に反します:

- 古代の大預言者ダニエルは、１１、１２章において歴史の大終結―キリストの再臨の時までのことを、順序良く預言しているのです。 これらの異常な、不思議な、驚くべきことは、いつまで続くのか、いつになったら終わるのか？その結末はどうなるのか？と２回聞いています。(12:6、8節)。１７９８年、１８４４年で異常な(口語訳)、不思議な(新改訳)、驚くべきこと(新共同訳)は終ってはいないし、人類史上、未曽有の諸事件が起こるのはこれからのことであることは誰でもわかるはずです。とするなら、タイムライン（時刻表）も未来に適用すべきものです。

- 現代の預言者、エレン・ホワイトは、次のように言っています:

「聖書の中には特に我々の時代、すなわち人の子が現れる直前の期間に関わる真理が書かれている。・・・ダニエルの預言の期間（複数）は大いなる終結の間際（イヴ＝very eve）まで延びており、その時起こる諸事件に光の洪水を投げかけている」（RH9-25、1883＝１RH３６７）

「大いなる終結」とは、キリストの再臨の時です（大争闘下１１）。「イヴ」という言葉は「クリスマスイヴ」等と用いられるように、再臨の「直前、間際」まで預言の期間は延びており、続いているということです。すべての預言的期間が１８４４年に終わったというのではないことは誰でもわかるはずです。１８４４年からもう１５０年以上も経ってしまったのですから、再臨間際まで延びている「預言の期間」は、２３００日一年の預言ではないことが分かります。再臨間際まで延びている「預言の期間」がダニエル書に別にあるに違いない。ダニエル12章の３つのタイムライン（時刻表）―ひと時とふた時と半時(１２６０日）と１２９０日と１３３５日のことです。それ以外にあるでしょうか。

「ダニエル１２章を読み研究しよう。それは終わりの時の前に、我々すべての者が理解を必要とするであろう（shall need）警告である」手紙１６１、1903，7-30.

これはいつ言われた言葉でしょうか。　１９０３年です。では、ダニエル１２章は未来のことでしょうか。それとも過去のことでしょうか。明らかに未来に迫っている「神の民の力を打ち砕く」事件、「荒らす憎むべき者が立てられる」大迫害についての警告なのです。

ホワイト夫人は、ダニエル 11:31, 32 は将来また繰り返されると言われました(MR Vol. 13, p394, 1904)。「常供の燔祭を取り除き、荒らす憎むべき者が立つ」ということは、ローマ法王至上権の確立が中世時代にあり、ヨーロッパにおいて神の民が迫害されたことを指します。同じことが(12:7、11)、すなわちローマ法王至上権が再び確立され、今度は全世界を支配することが、ダニエル 11、12 章に預言されているのです。

では、過去のことではなく、未来のこととすることに同意されるなら、ある人が主張するように、ダニエル１２章は、１日＝１年と計算すべきでしょうか。断じてそうはできません。これから再臨まで１２６０年、１２９０年、１３３５年以上もあると言うのなら途方もない年月になります。

ホワイト夫人は聖書解釈の大原則を次のように言っておられます：

「聖書の言葉は、象徴や比喩が用いられていない限り、その明瞭な意味に従って解釈されるべきである。」大争闘下３６５。

ダニエル１２章には、象徴が使われていませんので、字義通りにとるべきではないでしょうか。

ダニエル書、黙示録の預言は全部１日＝１年と解釈すべきだとすれば、ネブカデネザル王の狂気期間の「７つの時＝年」は、２５２０年となります。愚かな計算です。黙示録の１千年間は、１日＝１年と計算すべきでしょうか。

質問２．「預言の期間」は１８４４年に終わったのであって、その後は時に関する預言はないと書いてあるのではないか。

これは、質問１にも関連しています。まず、聖書解釈の大原則を覚えておきましょう：

「救い主の一つの言葉をもって、他の言葉を無意味にしてはならない」

大争闘下６９．

１．主題に関する他のすべての聖句を無視し、１つの聖句だけを用いてはならない。
２．文脈を無視してはならない、つまり問題の前後の節との関係をよく見る。
３．歴史的、状況的背景を無視してはならない。

次のような引用文によって、もう１８４４年以後は「預言の期間」「預言の時」はないと結論づけるのです:

１．「１８４４年から後において、時はテストではなくなった。そして時は、二度とテストとはならないのである。

主は、第三天使の使命が、前進し、主の散らされた子供たちに宣言されなければならないが、しかしそれは、時に重点をおくものであってはならないことを、わたしに示された。ある人々は、時についての説教から起きてくる誤った興奮を感じているのを、わたしは見た。しかし、第三天使の使命は、時の力以上に強力なものである。この使命は、それ自体の基盤の上に立つことができるもので、時によって強化される必要がないことを、また、きびしく、すみやかに(英文では、義をもって)なしとげられることを、わたしは見た。」初代文集１５５、１５６。

２．「厳粛な宣誓をもって天使が語っているところの時とは、世界歴史や恩恵期の終わりのことではなく、主の来臨に先立つ預言の時の終わりのことである。つまり、人々は一定の時について、別のメッセージを受けないということである。この時の期間、すなわち１８４２年から１８４４年に達して後は、明確な預言の時をたどることはできい。最も長い計算は、１８４４年の秋に達するのである」（７ＢＣ９７１）。

３．「このメッセージ（黙示録１０：６）は預言的期間の終わりを宣告しています」（２ＳＭ１０８）。

４．「異なった者たちによって時が次々と定められ、ことごとく過ぎ去るであろう。そしてこの時を定めるという影響が、神の民の信仰を破壊することに貢献するのである」 1T72, 73。

では、ホワイト夫人が「１８４４年で預言の時、あるいは期間は終わった」と言われた歴史的背景を考えてみましょう。これも聖書解釈の一大原則ですからよく考慮に入れなければなりません。

１８４４年の大失望の後、再臨信徒は二つに分かれました。第七日目安息日再臨教派(セブンスデー・アドベンチスト) と第一日安息日再臨教派(ファーストデー・アドベンチスト) に。

● セブンスデー・アドベンチストは、ダニエル 8:14 とダニエル 9:24－27 の預言の期間の計算は正しかったと認めました。しかし事件が間違っていたことに気がついて、さらに預言を研究したとき、イエスは、天の聖所から至聖所に移られたことを発見しました。彼らは最後のあがない、調査審判の働きをなさる大祭司としてのイエスの立場と働きを理解しました。彼らは至聖所に神の律法を見、安息日の重要性を悟り、セブンスデー・アドベンチストとなりました。

● ファーストデー・アドベンチストは聖所におけるあがない―調査審判の考えを受け入れませんでした。律法の啓示、第七日目安息日の啓示を受け入れませんでした。彼らは、２３００年の預言のタイムライン (時刻表) は、イエスの再臨の時であると議論し続けたのです。ダニエル９：２４～２７の預言の期間の計算が間違っていたのだと主張しました。そこで彼らは、その預言の期間をいじくって再臨の新しい日時の設定を試みたのです。彼らの誤りを正すためにホワイト夫人は次のように言われました:

「ファーストデー・アドベンチスト (第一日安息日再臨教団) は繰り返し時を定めた。その都度失敗しているにもかかわらず、大胆にもまた新たに時を定めたのであった。これは神が導かれたものではなかった。彼らの多くは真の預言の時を拒み、預言の成就を無視した。・・・大きな試練が１８４３年と１８４４年にあり、その時以来時を定めた者たちは皆、自らを欺き、他の人々を欺いてきたのであった」 (１Ｔ７３)。

「最初の使命宣布に当たって、審判の明確な時を伝えることは、神の命令であった。この使命の根拠をなす預言期間の計算が、２３００日の終わりを１８４４年の秋であると定めたことは、非難の余地がない。預言期間の始まりと終わりの新しい年代を発見しようとくり返し努力し、そうした主張を支持するのに必要な不健全な推論をすることは、人々の心を現代の真理から引き離すだけでなく、預言の解説に対するあらゆる努力を軽べつするものである。再臨の明確な時が、何度も定

められれば定められるほど、そしてそれが広く伝えられれば伝えられるほど、それだけいっそうサタンの目的にかなうのである。時が過ぎ去ると、サタンはその支持者たちをあざけり軽べつして、１８４３年と１８４４年の大再臨運動をも非難するのである。このような誤りを犯し続ける者は、ついにはキリストの再臨をはるか遠い将来に定めるようになる。こうして彼らは、誤った安心感を抱くに至り、多くの者がその惑わしに気づいたときには、すでにおそすぎるのである」大争闘下 181.

はっきりしていることは、ホワイト夫人が「預言の時が終わった」と言われたのは、ダニエル８：１４の２３００年が、４５７B.C～１８４４A.D年までに終わったと言われたのであって、その他の預言の時、タイムライン（時刻表）について言っているのではないということです。彼女が言っている「預言の期間」は、ダニエル９章の７０週、６２週、７週、１週の預言の期間のことを言っているのであって、他の預言のことを言っているのではないのです。

もし、１８４４年以来、時に関する預言はないとすれば、ダニエル、黙示録に出てくる多くの時に関する預言をどう解釈するのでしょうか。たとえば「災害が１日のうちに彼女を襲い」とか、「１０００年の間」などと黙示録に未来の預言の期間が出てくるではありませんか。

すべての預言の時、タイムライン（時刻表）、期間は、１８４４年で終わりで、もう研究すべきものではないとは言えないのではないでしょうか。

だからこそ「ダニエル 12 章を読み研究しよう。それは、終わりの時の前に我々すべての者が理解を必要とするであろう警告である」と訴えられているのです。

ダニエル１２章の３つのタイムライン（時刻表）は２３００日―年の預言的期間とは全く別のものであることに留意してください。

質問３．時を設定しているのではないか。

アンカー誌に、再臨、恩恵期間終了、日曜休業令、後の雨の時はいつと設定している記事がありましたらご指摘願います。
ダニエル１２章の解読を提供するマリアン・ベリー氏が、その研究で繰り返し注意しているのは、この研究は断じて時を設定しているのではないということです。再臨、恩恵期間終了、日曜休業令、後の雨は、いつかということではありません。「荒らす憎むべき者」、日曜休業令が立ったなら、どれくらいの期間迫害されるかということです。世の終わりの近いこと、サタンの驚くべき働きが開始されること、神の働かれる時が来たということが分かるしるしなのです。繰り返して言わせてもらいますが、再臨の日時を知るのではなく、非常に近いということを知るのです。再臨の日時を知るのは、神の民に対する迫害が絶頂に達した時、「絶体絶命」の時、「天からの声」が聞こえて、イエスの来られる日と時とが宣言され、永遠の契約が神の

民に伝えられるのです。大争闘下４１９。

「繰り返し、繰り返しわたしは時の設定に関して警告してきた。神の民のために、時に基づく使命はもう決してないであろう. 我々は聖霊が注がれる時、あるいはキリストの来臨の明確な時を知る必要はない」１SM１８８。

「時の設定ではなく」「キリストの再臨までの諸事件」を順序良く知ることが強調されているのです。

質問４. 時を定め、時をテストとしているのではないか。「第三天使の使命は、時に重点をおくものではない。... 時によって強化される必要がない」というのはどういう意味だろうか。(初代文集 156)

マリアン・ベリー氏の「警告」から引用します:

「ダニエル８：１４においてテストとなったのは、タイムラインではなく、それが再臨の日時を指していると考えた人たちによる誤りがテストとなったのであった。* 神はその誤りにも御手を伸べられ、それがテスト（試練）となることをお許しになられた。神はそのテストを道具としてお用いになり、全世界に真の福音を宣べ伝える最後の残りの民となるべき、心の真実な人々を集めようとされたのであった。
現在我々は、その誤りが何であったかを知っている。その預言とタイムラインが、今後神の民にとってテストとなることはない。我々は再び同じ誤りを犯すことはしない。今後ダニエル８：１４のタイムラインや、他のいかなるタイムラインも、再臨の日時を設定するために用いられることはない。これらの事実が、再臨に先立つ最終時代の諸事件を描写しているタイムラインの研究を邪魔立てすべきではない。
ファーストデー・アドベンチスト（第一日安息日再臨教団）は、裁きと十戒そして真の安息日について、ダニエル８：１４のタイムラインとその意味を十分理解していなかった。その結果、彼らはそのタイムラインで日時を繰り返し設定し続けたのであった。彼らの用いた論拠を、エレン・ホワイトは非聖書的かつ不健全なものと宣言した。

---

* 「最初の使命宣布に当たって、審判の明確な時を伝えることは、神の命令であった。この使命の根拠をなす預言期間の計算が、２３００日の終わりを１８４４年の秋であると定めたことは、非難の余地がなかった」大争闘下 181.
失望の原因は、預言の期間ではなく、１８４４年に再臨という事件がなかったためである。１０MR269.

『ファーストデー・アドベンチスト（第一日安息日再臨教団）は繰り返し時を定めた。その都度失敗しているにもかかわらず、大胆にもまた新たに時を定めたのであった。これは神が導かれたものではなかった。彼らの多くは真の預言の時を拒み、預言の成就を無視した。・・・大きな試練が１８４３年と１８４４年にあり、その時以来時を定めた者たちは皆、自らを欺き、他の人々を欺いてきたのであった』（１Ｔ７３）。

ダニエル書１２章に記されているタイムラインの研究は、イエスの再臨の時に関するテストを提示しているのではなく、終焉の間際へと我々を導く未来の諸事件を描写している。」[警告]英文、ｐ24。

時は、１８４４年以来、テストではなくなりました。今後も決してテストとはならないでしょう。

最後のテストは時ではなく、何であると言われているでしょうか。

「安息日は、特に論争点となっている真理であるから、忠誠の大試金石（テスト）となる。最後の試練（テスト）が人々を襲うとき、神に仕える者と神に仕えない者の区別が明らかになる」大争闘下 375。

しかし、時を知ることは、エルサレム滅亡の時のように重要です。ユダヤ人が亡びたのは、「おとずれの時を知らないでいたから」（ルカ 19：44）でした。

第三天使の使命は、黙示録１３章の「獣」の警告であり、獣とは世に何かを明らかにすることです。この使命は全世界に約一世紀半も述べ伝えられてきました。その働きは時に関するメッセージを必要としませんでした。確かにそれは、時に掛かっているものではありません。タイムライン（時刻表）は全く違った目的のために与えられているのです。それはまじかに迫っている悩みの時を通過する時に神の民を慰め、希望を与えるためのものです。目的が違います。しかし、このタイムライン（時刻表）は第三天使の使命と調和し、それにさらなる情報を追加するものです。タイムライン（時刻表）のことを全然知らないで第三天使の使命によって警告を与えられる人もいるかもしれません。

１８４４年のように、いつ何が起こるという日時を定めるためのタイムライン（時刻表）ではありません。「荒らす憎むべき者が立ったなら」大迫害が始まるということ、神の民の悩みの時は短く、主が来られる時は非常に近いことを知らせ、どんな苦難の中にあってももう時は近いことの確信を与えるためのものです。

初代教会は、迫害がどれくらい続くかということに関しては一切知らされていませんでした。ただ彼らは、愛する主はまもなく来られるという信仰のもとに耐えていったのでした。もし彼らがローマ帝国の迫害の後に、法王教による１２６０年の迫害

があること、その後ラオデキヤ状態が２００年も続いてそれから、最後の民が最終的な大試練にあって後、主は再臨なさるということを知っていたら、苦難に耐えられたでしょうか。主は憐れみのうちに、初代教会の純情な愛と信仰によって、時の切迫感を持ち続けることを許されたのです。

神は、各時代預言の解読が必要と思われた時に、摂理のうちに器を立てて開かれるのです。世の終わりまで預言の研究をし続けなければなりません。世の終わりの終局まで「光の洪水」を投げかけられるというのです。

質問５．預言の時、預言の期間に関する研究は不必要ではないか。

「ダニエル１２章を読み研究しよう。それは終わりの時の前に、我々すべての者が理解を必要とするであろう（shall need）警告である」手紙 161、1903、7-30。

イエスは言われました：

「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つのを見たならば(読者よ、悟れ)」マタイ 24:15.

「．．．終わりの働きは短期間でなされなければならない。使命は神の任命によって伝えられ、大いなる叫びへとふくれあがるであろう(will swell)。その時、ダニエルが証をするために立ち上がるであろう(will stand)」手紙 54、1906。

「ダニエルの預言の期間（複数）は大いなる終結の間際（イヴ＝very eve）まで延びており　その時起こる諸事件に光の洪水を投げかけている」（RH 9-25、1883＝１RH３６７）。

「彼らの理解を明らかにし、『確実な預言の言葉』の上に信仰を確立させることが、イエスの目的であった」大争闘下 42。

救い主の初臨の時と十字架は、非常にはっきりとダニエル９章に預言されていました。次の言葉を吟味してください：

「天の会議においては、キリストが来られることは定められていた」国と指導者下３００。

「同じように、キリストのときが決定されていた。時という大時計がその時間をさし示すとイエスはベツレヘムにお生まれになった」1 希望２２。

しかし、

「神は最初から初臨の正確な時をお知らせになったのではなかった」国と指導者下３００。

時が進むにつれ、事件が起きる前に、預言が解き明かされていきます。キリストの再臨の時は、その直前の「天からの声」〔大争闘下４１９〕までは誰にも知らされません。しかし、終わりの時に、ローマ法王が全世界を支配するという事件の前に、預言に関する解明がなされ、警告がなされるはずです。「大いなる終結の間際まで　その時起こる諸事件に光の洪水を投げかけている」のですから。

再臨運動の始まりの時に、預言の研究に対する二つの反応がありました。一方は、平和だ、無事だといって致命的な安心感に陥った無関心、もう一方は、時の設定を繰り返す狂信。今日も同じではないでしょうか。

「サタンは、もし人々を**無関心**という氷の中に閉じ込めておくことができないならば、彼らを**狂信**という炎の中に押し出そうとする」５T６４４。

昔の過ちを繰り返さないようにしましょう。真理の誤解、曲解（きょっかい）、歪曲（わいきょく）▸ から解放されて、聖霊の導くあらゆる真理を受け入れて、終わりまで投げかけられる「光の洪水」に進んでいきましょう。さもなければ闇に追いつかれると言われています。

質問 6. これから起こる出来事を熟知していたとしても、それが私たちを救うことはできない。私が完全にキリストのものとなることによってしか終わりを突破する備えはできないと思う。
私たちの目はサタンの策略を暴くことにではなく、キリストにもっと目を注ぐ必要があるのではないだろうか。

● 確かに終末の諸事件を熟知することが私たちを救うのではありません。アーメン。しかし、次の言葉をも心にとめておくことが肝心です。

エレミヤ書 8:7 「空のこうのとりでもその時を知り、山ばとと、つばめと、つるはその来る時を守る。しかしわが民は主のおきてを知らない」（主のさばき＝欽定訳）
ゼパニヤ書 2:1 「あなたがた、恥を知らぬ民よ、共につどい、集まれ。
2:2 すなわち、もみがらのように追いやられる前に、主の激しい怒りがまだあなたがたに臨まない前に、主の憤りの日がまだあなたがたに来ない前に。
2:3 すべて主の命令を行うこの地のへりくだる者よ、主を求めよ。正義を求めよ。謙遜を求めよ。そうすればあなたがたは主の怒りの日に、あるいは隠されることがあろう」
※ 「もみがらのように追いやられる前に」は、欽定訳では「法令が出される前に」

▸ 誤解＝ある原語表現の意味をとりちがえること。
曲解＝事実、または相手の気持ちなどを、わざと曲げて解釈すること。
歪曲＝事実などをいつわりゆがめること。

謙遜を求めよ。そうすればあなたがたは主の怒りの日に、あるいは隠されることがあろう」
※　「もみがらのように追いやられる前に」は、欽定訳では「法令が出される前に」となっていて、ホワイト夫人は、日曜休業令に適用しています（ＲＨ１９０８－１１－１９）。

テサロニケ人への第二の手紙 2:10 「また、あらゆる不義の惑わしとを、滅ぶべき者どもに対して行うためである。彼らが滅びるのは、自分らの救となるべき真理に対する愛を受けいれなかった報いである」

「人間は、神があわれみのうちにお与えになった警告を拒否して無事ではあり得ない」大争闘下１４９。
大争闘下３５９、３６０：「キリストのみ言葉によって弟子たちに将来がはっきり示されていたように、われわれにも将来のことが預言の中にはっきり示されている。恩恵期間の終わりに関係のあるできごとと、悩みの時のために備える働きとが、はっきり示されている。しかし多くの人々は、全然啓示を受けなかったかのように、これらの重要な真理を理解していない。サタンは、彼らに救いに至る知恵を与えるような感化をことごとく奪い去ろうとうかがっているので、彼らは悩みの時に備えができていない」。

●アンカー誌は、永遠の福音の第三天使の使命を構成している二つのことを強調しているのです。来るべき事件の警告と、もう一つは、至聖所から提供される希望です。
質問者のご指摘のとおり、完全なキリスト者として仕上げられる「道あるいは方法は聖所にある（欽定訳）」（詩篇７７：１３）ことを強調しているのです。
完全にならなければならないと標準だけを示しているだけでは、失望を与えるだけです。律法主義です。文字は人を殺すだけです（２コリント３：６）。

『『かつてなかったほどの悩みの時』が、まもなくわれわれの前に展開する。それだからわれわれには、一つの経験――今われわれが持っておらず、また多くの者が怠けて持とうとしない経験――が必要なのである。現実の困難というものは、予想したほどではないということがしばしばある。しかし、われわれの前にある危機の場合は、そうではない。どんなに生々しく描写しても、この試練の激しさには、とうてい及ばない。この試練の時に、人間は、みな、自分で神の前に立たなければならない。『主なる神は言われる。わたしは生きている、たといノア、ダニエル、ヨブがそこにいても、彼らはそのむすこ娘を救うことができない。ただその義によって自分の命を救いうるのみである』（エゼキエル書１４：２０）。

今、われわれの大祭司がわれわれのために贖いをしておられる間に、われわれは、キリストにあって完全になることを求めなければならない。救い主は、その思いにおいてさえ、誘惑の力に屈服されなかった。サタンは、人々の心の中

に、なんらかの足場を見つける。心の中に罪の欲望があると、サタンはそれを用いて誘惑の力を表わす。しかし、キリストはご自身について、「この世の君が来る‥‥。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない」と宣言された（ヨハネ１４：３０）。サタンは、神の子の中に、彼に勝利を得させるなんのすきも見つけることができなかった。神のみ子は、天父の戒めを守られた。そして、サタンが自分に有利に活用することのできる罪が、彼の中にはなかった。これが、悩みの時を耐えぬく人々のうちになければならない状態なのである」大争闘下396－397。

初代文集の「第三天使の使命」の章を注意深く読んでください。そこに、第三天使のバランスのとれた使命を見いだすことができます。「これまでに人類に伝えられたことのない、恐怖すべき威嚇をもった恐るべき警告」（初代文集414）と表現されているかと思うと、また「第三天使の使命は『ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある』と言ってメッセージを終っている。彼はこの言葉を繰り返したときに、天の聖所を指した。このメッセージを信じるすべての者の心は、至聖所に向けられる」「失望した人々に、天の聖所の至聖所への道を示しているのを見た。　彼らはイエスを見出して、新たな希望と喜びを味わうのである」とも表現されている（414—415）。

すなわち、第三天使は「恐るべき警告」と「希望と喜び、確信」の二つの柱で成り立っていると言えましょう。第三天使は４１４～４２４に１０回も「至聖所」「聖所」を指したと表現されています。我々は、この両面をはっきり言えなくなっているのではないでしょうか。

来るべき、法王教による新世界秩序の恐るべきことと、主の日に立ち得ることを可能とさせる、至聖所での「特別なあがない」の働きを強調しなければ、セブンスデー・アドベンチストではありません。

十字架だ、十字架だと言いながら、十字架で死なれ、甦られた御方が今どこで何をしておられるかを知らなくて、ほんとうに主を知るといえるでしょうか。それは安息日を守っていて安息日の主を知らないのと同じではないでしょうか。その大祭司としての立場と働きを理解しなければ「この時代にあって必要な信仰を働かせることは不可能である」（大争闘下２２２）と言われています。「そこには、カルバリーの十字架からの光が反映している」（同上）ならば、セブンスデー・アドベンチストこそ、十字架の光に最も浴していなければならないはずです。

● サタンの策略を知ることと、キリストに目を注ぐこととは矛盾しません。イエスを愛することと、サタンを憎むこととは、両方真理です。

エペソ人6:11「悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい」悪魔の策略に対抗するためには、悪魔の性質、目的、方法、計画、その運動、手下を知らなければなりません。
「この大欺瞞者が最も恐れていることは、われわれが彼の欺瞞を見破ることである」大争闘下２５８。

我らのイエスについて聖書はこう言っています:
「あなたは義を愛し、不法を憎まれた。それゆえに、神、あなたの神は、喜びのあぶらを、あなたの友に注ぐよりも多く、あなたに注がれた」ヘブル人への手紙1:9。

証しの書に次のように記されています:
「彼らの主にとって、罪はいまわしく嫌悪すべきものであったが、彼らにとってはそうではないのである。彼らは、それに対して、キリストのように決然と抵抗をしない。彼らは、罪のはなはだしい邪悪さといまわしさを悟っていない。そして、暗黒の君の性質についても権力についても、盲目である。彼らには、サタンとその働きに対する敵意はない。というのは、彼の権力と悪意、また、キリストとその教会に対する彼の広範囲に及ぶ戦闘について、彼らはきわめて無知だからである。多くの人々はここで欺かれる。彼らは、自分たちの敵が、悪天使たちの心を支配する大指揮官であって、よく練った計画と巧妙な活動をもってキリストに対抗して戦い、魂の救いを妨害しようとしていることを知らない。キリスト者と称する人々、いや牧師たちの間でさえ、サタンについて語るのは、講壇から何かのついでに触れるくらいのことで、非常にまれである。彼らは、サタンの絶えざる活動と成功の証拠を見落としている。彼らは、サタンの狡猾さについてたびたび警告を受けるが、それに気をとめない。彼らは、サタンの存在そのものを無視しているように見える」(大争闘下２４７)。

ローマ・カトリックは「サタンの権力が生んだ一大傑作で」「サタンの代表者」(大争闘上４４)です。
宗教改革者たちは、ローマ教会の罪を暴露するために立ち上がりました(大争闘下３２８)。
「祈りをもって聖書を研究するとき、プロテスタントは法王制の本性を知り、法王制を嫌悪しそれを避けるようになる」(大争闘下３３０)のです。
私たちが嫌悪するのは、法王制であって、虜になっている魂を愛するからです。「我々は罪の人(不法の者)の悪を暴露するために召されているのである」(牧師への証２３３)。
聖霊に満たされた民によって、「バビロンの罪は暴露される。教会の法令を政権によって強制することの恐るべき結果、心霊術(唯心論)の侵入、法王権のひそかではあるが、急速な発展などがみな暴露される」(大争闘下３７６)のです。

なぜですか。主のごとく義を愛し、不法を憎むからです。

もし私たちが、この憐れみの警告のメッセージを伝えることを怠るとどんな結果になるでしょう:

「災害の結果に苦しんで、悪人たちの多くは怒りに燃えた。それは恐ろしい苦悶の光景だった。親は子供たちを激しく非難し、子供たちは親を、兄弟は姉妹を、姉妹は兄弟を非難していた。『あなたがわたしに真理を信じさせまいとしたのだ。そうでなければ、こんな恐ろしい目に会わずにすんだものを』と言って、大声で泣きわめ/

心の起きるたびに、それを静めてしまって、こんなことになるとは言わなかったではないか。わたしたちに警告する人があると、あれは狂信者で、わたしたちを滅ぼす悪い人たちだと、あなたは言ったではないか』と言って、彼らを責めた。しかしわたしは、牧師たちも神の怒りをまぬかれないのを見た。彼らの苦しみは、人々の苦しみよりも十倍も激しかった」初代文集４５５、４５６。

寵愛されたエルサレムのために泣かれた主イエスは、今日も泣きながらやさしく訴えておられます:

「いよいよ都の近くにきて、それが見えたとき、そのために泣いて言われた、
『もしおまえも、この日に、平和をもたらす道を知ってさえいたら……しかし、それは今おまえの目に隠されている。
いつかは、敵が周囲に塁を築き、おまえを取りかこんで、四方から押し迫り、
おまえとその内にいる子らとを地に打ち倒し、城内の一つの石も他の石の上に残して置かない日が来るであろう。それは、おまえが神のおとずれの時を知らないでいたからである』」。ルカによる福音書 19:41～44。

永久に恵みの戸が閉ざされる時が迫っています。

「あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。近くおられるうちに呼び求めよ。
悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。
そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」イザヤ書 55:6～７。

結論: ダニエル書１２章の三つのタイムライン･(時刻表) は決して再臨、恩恵期間の終了、日曜休業令、後の雨の時を定めているのではありません！
ただ終末の接近を知らせるものです！
ダニエル１２章は過去の事件を繰り返して書いているのではなく、未来の事件の警告です！
最後のテストは、時がテストではなく、安息日がテストとなります！
終末の諸事件の知識によって救われるのではなく、時と諸事件を支配したもう御方に対する「愛によって働く信仰」によって救われるのです。
最後の悩みの時を通過するのは、キリスト者としての品性を完成した者のみです。そのためにキリストは、至聖所において私たちのために「最後のあがない」の働きをしておられるのです。
キリストに目を注げば注ぐほど、サタンの策略を知り、サタンとその働きに敵意をあらわすはずです。罪のはなはだしい邪悪さといまわしさを、自分の内と外に見、「悲しみの人」となり、主の純潔を慕うようになるのです。

「警告」導入版
先月号の続き

第２章

マリアン・ベリー

タイムライン（時刻表）はどのように始まり終わるか?

ダニエル書に、7つのタイムライン（時刻表）がある。最初の4つのタイムライン（時刻表）が、最後のダニエル12章の３つのタイムライン（時刻表）がどのように始まり、終わるかという**前例**を据え付けた。このように聖書は、聖書自体が解釈者なのである。人間の推測は許されない。

ダニエル書の７つのタイムライン（時刻表）は次のようなものである：

1．ダニエル4:16　ネブカデネザルが狂人となった7年間のタイムライン（時刻表）。
2．ダニエル7:25　ヨーロッパにおける法王教至上権(No. 1)1260年間支配。
3．ダニエル8:14　２３００年間（４５７B.C.～１８４４A.D.）
4．ダニエル9:24　４９０年間（４５７B.C.～4A.D.）
5．ダニエル12:7　字義どおりの１２６０日間、神の民の力を打ち砕く（迫害）。
6．ダニエル12:11　字義どおりの１２９０日間、全世界を支配する法王至上権(No. 2)。
7．ダニエル12:12　字義どおりの１３３５日間、死の法令からの救出を「待つ」。

聖書の全てのタイムライン（時刻表）の始まりと終わりは次の事で決まる：

1．聖書の預言の成就
2．「語る」声、つまり、
3．立法および司法権の活動、実施（法律、または審判を下す）

「国家が『物言う』とは、その立法および司法権の活動のことである。」
大争闘下 161

最初の４つのタイムライン（時刻表）が、
ダニエル１２章の最後の３つのタイムライン（時刻表）の前例を据える。

前例の原則

（最初に言及したことに従うというルール）

例　１．
ネブカデネザルが狂人となった７年間のタイムライン（時刻表）。

A. ダニエル 4:16 の預言が、ダニエル 4:33 に成就した時からその７年が始まった。「この言葉は、ただちに（同じ時に＝欽定訳）ネブカデネザルに成就した。」ダニエル書 4:33。

B. その７年は「語る声」で始まった。
天から声がくだって言った、「ネブカデネザル王よ、こうして七つの時を経て、」ダニエル書 4:31。

C. その７年は、立法および司法権の活動から始まった。
「この宣言は警護者たちの命令によるもの、...』と」。ダニエル書 4:17。
「いと高き者の命令（法令）であって、わが主なる王に臨まんとするものです」
ダニエル書 4:24。

例　２．
ヨーロッパにおけるローマ法王至上権 No. 1 の１２６０年間の支配

A. ダニエル 7:25 における１２６０年の預言が成就した時に始まった。

B. ローマの皇帝ユステイアヌスの法律条文。この条文によって、ローマの司教は、「全キリスト教会の頭」という肩書きが与えられ、教権が与えられた。また「異端の矯正者」としての政権も与えられた。それによって、紀元５３８年にヨーロッパ全土にローマ法王至上権 No. 1 が確立され、迫害が始まった。

C. 「旧世界」ヨーロッパにおけるローマ法王至上権 No. 1 は、ちょうど１２６０日で終わった。１７９８年、フランスのナポレオンによって法王が捕らえられたのである。１２６０日のタイムライン（時刻表）は、皇帝ユステイアヌスの立法活動、またはフランス政府議会の判決によって終わった。

例　３．
２３００年のタイムライン（時刻表）

A. ダニエル８：14 と 9:25 の預言の成就によって始まった。

B. それは、エルサレムの再建命令（法令）によって始まった。（ダニエル 9:25）。

C. それは、法的活動によって終わった（１８４４年に調査審判が始まった。ダニエル 7:9－12, 13－14 を参照）。

例　4.

「７０週」または４９０年のタイムライン（時刻表）

A．４９０年のタイムライン（時刻表）は、ダニエル 9:24 の預言の成就によって始まった。
B．エルサレムの再建命令（法令）によって始まった。
C．それは、３４A.Dにステパノを石で殺す法令（議会またはサンドヒドリンの活動）によって終わった（これは、キリストの代表者に対する法的判決であった）。

結論：ダニエル書の最初の４つのタイムライン（時刻表）は、預言の成就、「語る声」、または、法令によって始まり、法令、または法的活動、判決によって終わっている。これが、ダニエル書の最後の３つのタイムライン（時刻表）がどう始まり、どう終わるかを示す前例を据えたのである。

キーポイント（重要な鍵）：ダニエル書と黙示録は一つの預言のユニット（構成単位）である。ダニエル書１２章にある３つのタイムライン（時刻表）は、黙示録にその成就を見る。ダニエル１２章のタイムライン（時刻表）が始まり、そして終わる預言の成就を、我々は未来に起こる事件として黙示録の預言に見るのである。

「ダニエル書は、ヨハネに啓示され開かれた。そしてこの地上の最後の場面へと我々を導くものである」牧師への証 115。

●どのようにダニエル１２章のタイムライン（時刻表）を始めるか

字義どおりの１２６０日タイムライン（時刻表）

1. ダニエル 12:7 の「ひと時と、ふた時と、半時」または、１２６０日のタイムライン（時刻表）は次のように始まる：

   A. 黙示録 13:5 の預言の成就
   B. それは、「大言を吐き汚しごとを語る口」、その声は、
   C. 世界的日曜休業令という立法活動による。それは、「全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い」「刻印」を受ける（黙 3:3）とあるように、全世界の国々を包含する。

字義どおりの１２９０日タイムライン（時刻表）

2. ダニエル 12:11 のタイムライン（時刻表）も次のように始まる：

   A. 黙示録 13:5 の預言の成就

B. それは、「大言を吐き汚しごとを語る口」、その声は、
C. 世界的日曜休業令という立法活動による。それは、「荒らす憎むべき者を立てる時」であり、黙示録の「獣」のことであり、法王を頭とする新世界秩序（政府）として知られている。これがローマ法王至上権 No. 2 と黙示録 13 章に描写されているのである。

注： ベストセラーとなっている、イエズス会士、マラカイ・マーチンの「*この血の鍵*」の表紙を見ていただきたい。その副題に「ヨハネ・パウロⅡ世、新世界秩序（新世界政府）の支配獲得のために、ロシアならびに西側と苦戦」とある。

字義どおりの１３３５日タイムライン（時刻表）

3. ダニエル 12:12 の１３３５日タイムライン（時刻表）は次のように始まる:
A. 黙示録 13:11 の預言の成就によって、
B. それは、「ほかの獣が小羊のような角が二つあって、龍のように物を言った」
C. それは、アメリカ合衆国における立法活動、または、日曜休業令のことを指している。

●ダニエル１２章のタイムライン（時刻表）の終わり

ダニエル 12 の 3 つのタイムライン（時刻表）は、3 つの同じ活動によって終わる:

A) 黙示録 13:15 の預言の成就によって、
B) それは、地上の政府、または天の政府の「語る声」によって、
C) それは、立法権、法的権力の実施である。

字義どおりの１２６０日タイムライン（時刻表）の終わり

1. １２６０日タイムライン（時刻表）は、次のように終わる:
A) 黙示録 13:15 の預言の成就によって、
B) 「獣の像が物を言うことさえできるようになり」
C) それは、「その獣の像を拝まない者をみな殺させた」、すなわち、世界的な死の法令の立法化、実施のことである。

字義どおりの１２９０日タイムライン（時刻表）の終わり

2. １２９０日タイムライン（時刻表）は、次のように終わる:
A) 黙示録 16:18 の預言の成就によって、
B) それは、天の法廷からバビロンに向かって宣言される運命の「もろもろの声」で語り、
C) それは、「バビロンは倒れた」と宣言する。これが、ローマ法王至上権Ｎｏ．２に終止符を打つのである。（黙１８）。

字義どおりの１３３５日タイムライン（時刻表）の終わり

3. １３３５日タイムライン（時刻表）は次のように終わる:
   A) 黙示録 16:17 の預言の成就によって、
   B) それは、神のみ座、「大きな声」で語る、
   C) 神の立法的、法的活動である。

神の声は「一撃の行為」であり、次のことが成し遂げられる：

A. それは「事はすでに成った」と発表する。黙示録 16:17. (神の民の試練はついに終わった)
B. それはイエスの再臨の日時を発表する。
   (「神の声」は、世界的死の法令の時に神の民を救出する声であるが、イエスの再臨と勘違いしてはならない)。
C. それは神の民を「その捕囚から解放」する（その時、勝利の叫びが響く)。
D. それは聖徒たちに栄光を与えるので彼らの顔の輝きを、悪人は見ることができないようにする。
E. それは悪のバビロンの破滅の始まりを宣言する。
F. それは永遠の契約「祝福」を宣言する。
G. それは神の律法を守る者たちを擁護する。
H. それに続いて第三天使の使命を受け入れて死んだ義人たちの特別な復活がある。

「神の声」についての詳細は、大争闘下巻４１章、４０９—４３８、初代文集６３、６４、１Ｔ１８４、３５４を参照。

タイムライン（時刻表）の始まりと終わりのチャート

タイムライン　　年代

番号	章 タイムライン	主題	成就した預言	「語る」声（法令）	立法的活動	タイムラインの始まり	タイムラインの終わり
1.	7年	ネブカデネザル	ダニ4:16、28	ダニ4:31	いと高き者の法令		狂気からの救出
2.	7 1260年	法王教No.1	ダニ7:25	ユスティアヌスの回勅	５３８A.D— —１７９８A.D	迫害 法王至上権No.１の開始	法王教からの救出
3.	8 2300年	調査審判	ダニ8:14	アルタシャスタの法令	４５７B.C １８４４A.D～ 恩恵期間終了	バビロンからの救出	罪からの救出
4.	9 490年	イスラエル	ダニ9:24	アルタシャスタの法令 サンヒドリンの決定	４５７B.C ３４A.D	バビロンからの救出	イスラエル恩恵期間終了. 「切り取られる」
5.	12 1260日	「聖なる民」 「残りの民」 ダニ12:7	黙13:5	世界的日曜休業令 （黙13:5）	(世界) 日付？	迫害始まる 全悪人「獣」を拝む	世界的死の法令
6.	12 1290日	法王教No.2	黙13:5 黙16:17 黙16:18	世界的日曜休業令 神の声 運命の声	(世界) 日付？	迫害者の支配始まる	バビロン倒壊の始まり
7.	12 1335日	「聖なる民」 「待つ」 ダニ12:11	黙13:11 黙16:17	米国日曜休業令 神の声	(米国) 日付？ ？	逃げる時	悩みの時始まる 世界的死の法令からの救出

法王教のねらい（大争闘下321）

① 再び世界を支配すること
② 迫害を復活すること
③ プロテスタントが行ったすべてのことを無効にすること

「世界は、恐ろしい結果をもたらす問題に直面しようとしている。地の権力者たちは、合同して神の戒めに逆らって、．．．偽りの安息日を守ることによって教会の習慣に従うよう（法令によって）命じるのである。」大争闘下３７４。

世界統一政治

「荒らす憎むべき者」

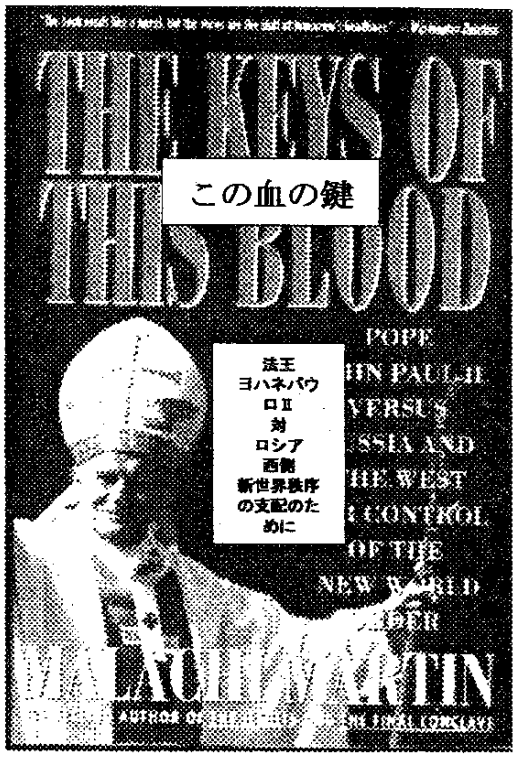
「反キリスト」

「不法の者」

「世界を支配する獣」

世界統一宗教

世界統一経済



バチカンの新世界秩序構築戦略－イエズス会士、
マラカイ・マーチン著

紀元2000年一大聖年祝典、平和の使者が平和の都「エルサレム」にて！

「救世主であるイエス・キリストの誕生祝いをするめでたい年である。キリスト教の最大宗派であるローマ・カトリックは、大聖年を企画している。しかも内輪の祝いではなく、宗派を越えて人類が連帯し地球の平和を実現するための契機としてとらえているのだ。」ローマ法王、竹山節子、１９８。
何千年もの民族、宗教の聖地をめぐる争いは止むことがなかった。中東和平を一気になしとげる偉業を、全世界は目撃するのであろうか。あまりも多くのキリスト教派、あまりにも多くの宗教が、争い、憎むことはこれで止む。「愛と一致こそ２１世紀の平和の礎だ、結束しよう」と、法王の指導力のもとに、かつてなかった劇的、感動的な世界的祝典が催されるであろう。血の代わりに、多くの喜びの涙がエルサレムばかりでなく、全世界で流されるであろう。ネブカデネザルの像を拝さなかった三青年（三天使の使命者）にどんなことが起こったか？歴史は繰り返されるだろうか？

サインズ・オブ・ザ・タイムズ(時のしるし)

また近代史の歴史的事件、預言の成就

１９８９年にバチカンの最大のライバル共産主義帝国（無神論権力）の母体ソ連がローマ法王教に敗れた。
１９９８年1月２５日今度はキューバのカストロとバチカンのヨハネ・パウロ二世との和解！

法王の訪問で宗教界に勢い

キューバ民主化に拍車も

【ハバナ26日共同】ローマ法王ヨハネ・パウロ二世のキューバ訪問は二十五日終了したが、キューバでは今後、宗教界の役割が急速に回復するとみられ、こうした潮流が民主化に拍車を掛ける可能性が出てきた。

法王の帰国を前に、南米のキリスト教指導者の一人は「法王訪問は大成功だ。宗教界とキューバ政府の雪解けの第一段階は終わった。今後、教会と政府は対話を進め、宗教界が社会で果たすべき役割が広がっていくのは確実だ」と自信を見せ、「自由化はやがて経済や思想の面にも波及する。政府が再び締め付けを強めることはあり得ない」と期待を込めて話した。

また、地元の宗教関係者は「時間はかかると思うが、法王の訪問が民主化への弾みとなる」と口をそろえた。

法王訪問の受け入れはカストロ政権にとって「もろ刃の剣」とされた。政権側は米国の対キューバ経済制裁に反対する法王を受け入れ、内外にアピールする効果を狙ったとされる一方で、宗教界が勢いづくことで反体制派の動きも助長、政権に対する脅威となる恐れもあった。

それだけに政府が今後、布教や表現の自由を保障するため、立法化などに積極的に取り組むのかどうかは懐疑的な声もある。

ハバナの革命広場で二十五日開かれたミサに出席した市民によると、会場では人権擁護団体が、良心の収監者は六百人などのプラカードを掲げたという。キューバの集会でこうした主張が公の場で掲げられるのは異例で「自由」を求める国民の声が次第に広がろうとしている。

25日、ハバナの革命広場で行われたミサの最後に、参加者の呼さいにこたえるローマ法王ヨハネ・パウロ2世（ロイター＝共同）

無神論者が突然改宗？

タイム誌 1998, 1-26 号によると、カストロはイエズス会の学校で教育を受けているとのこと。
Cherith Chronicle1997、12 月号によると、イラクのスポークスマン、テリク・アシズもカトリックである。
ダニエル 11:40～45 に「北の王」＝ローマ法王教が「南の王」無神論権力＝共産主義諸国を制覇し、全世界を支配することが描写されている。
対立していた国々が次々と「新世界秩序」の枠組みに組み込まれていくのを我々は見ているのである。

2．本の紹介：「ローマ法王」竹下節子著より一部抜粋

知名度と認識度

ローマ法王は多くの肩書きを持つ。
「ローマ司教、ローマ管区首都大司教、イタリア首座大司教、西欧総大司教、ヴァティカン市国元首、全カトリック教会の最高司祭、使徒ペテロの後継者、イエス　キリストの代理者」だ。しかし、いわゆるローマ法王（日本のカトリック教会では教皇と呼ぶ）を表す通称は、パパ、パップ (PAPE)、ポープ (POPE) など、要するに、「おとうさん」というシンプルさである。ローマ法王とはいったい何者なのか。

日本で名前と存在をよく知られている国際的な有名人で、その実、その実態も、地位も機能も影響力もあまりにも知られていない人物の筆頭がこのローマ法王だろう。
多くの日本人にとって、ローマ法王は日本を訪問する時には歓迎会やセレモニーの模様が映し出されるメディアティックな存在に過ぎない。ローマ法王が、ローマ市内にある世界で一番小さな国ヴァティカン帝国にいるローマ・カトリックの首長だということは知っていても、ローマ　カトリックの信者ではないおおかたの日本人にとっては所詮一人の外国人に過ぎない。有名人だから動向を注目したり、宗教者であるからそれなりの尊敬をはらったりといっても、それはインドに亡命中のチベット仏教の首長であるダライラマに対するものと同じレベルだといってもいいだろう。
もちろんローマ法王がダライ・ラマよりも大きな実際の権力を持っていると認識する人々もいる。しかしその多くは、フリーメイソンやユダヤ人の組織を語るように何やら国際的な暗躍をしているのだろうという程度のもので、認識というよりは偏見に近い。ローマ法王が何よりも、現代社会に大きな影響力を持つ、歴史的かつ政治的な公式の存在であることをきっちり把握している人は少ないだろう。

影響力の実態

ところが、実は、この認識不足は国際社会、外交における日本の見識にとって致命的な欠陥となり得るほど重大なことなのだ。
確かに日本のいわゆるカトリック人口は 0.3 パーセントに過ぎない。しかし、洗礼を受けずとも、カトリック系の教育施設の世話になった者の数は日本で 10%を越すとも言われている。実際、皇后陛下を筆頭に、カトリック系のミッションスクール出身の多くの女性が、社会的な影響力の大きいエリート男性と結婚しているという事実も見逃せない。また、明治以来の日本が採用し、好むと好まざるとにかかわらず今の日本の第二の本性となった「西洋文明」の基礎にあるのがキリスト教文化であり、その根底にあるのがカトリシズムであることも忘れてはならない。なぜなら、カトリックというのはかなり特殊に発展してきた高度の官僚組織であり、

多民族のせめぎあうヨーロッパを精神的にも具体的にもまとめあげてきたからだ。

近代オリンピックでさえ、世界中に広がるカトリックのドミニコ修道会の人脈を介して実現した。戦後の東西冷戦の終結はまずカトリックが優勢なポーランドからおとずれた。

欧州連合は現在の世界経済の中心の一つとして機能している。個別の国だけではなくて「ヨーロッパ」という概念を理解することなしには経済政策も外交政策ももはや成り立たない。イギリス女王は国教会の首長であるが、ブレア首相夫妻は熱心なカトリック信者である。フランスのシラク大統領夫妻もカトリックであり、夫人はカトリックの修道女会の、ミッションスクール出身で、同窓会を仕切っている。そこには多くの政治家夫人が属している。夫妻は大統領就任の直後にローマ法王を表敬訪問した。ドイツのコール首相も正統的なカトリックである。

もちろん彼らが政治の場に直接カトリックの立場を持ち込むわけではない。しかし、彼らの共通点であるカトリック的な常識や感性というものを知ることは、ヨーロッパの理解に新しい視野を広げてくれることだろう。イタリアやスペインなどのラテン諸国がカトリックのアイデンティティと強く結びついているのはいうまでもない。

中南米ラテン諸国もむろん同様である。

また、北米やプロテスタント国においてもローマ・カトリックの存在は大きく重い。かつての巨大な権力であったカトリック教会との葛藤そのものが彼らの歴史的なアイデンティティを形作ってきたからだ。しかも、アメリカの一般大衆向けに「最も尊敬する人物」のアンケートをとれば、その折々の大統領の名の次に必ず第二位としてあがってくるのがローマ法王の名である。なぜなら、アメリカではプロテスタントが優勢だとはいってもプロテスタントは諸派に分裂しているので、同じ首長を戴く宗派としてはローマ・カトリックが人口の２５パーセントを占める最大宗派であるからだ(プロテスタントは総数で５８パーセント、１９９４年)。アメリカでもまたカトリック系の教育施設は充実していて、プロテスタントの子弟の多くもカトリック系学校の出身である。

アメリカのカトリック教徒が、労働力として海を渡ってきた貧しいイタリア移民などに代表されていたのは過去のことで、今は教育施設の充実もあって、平均するとカトリック信者はプロテスタント信者よりも高い学歴を誇っている。その中でのトップはアイルランド系で、ユダヤ人と並んでアメリカで最も高い学歴を有する。アイルランド系のケネディ大統領がアメリカ初のカトリックの大統領であったことはよく知られている。犯罪率激減の実績を誇る現ニューヨーク市長もイタリヤ系のカトリック信者だ。カトリック系大学に進学するのはカトリックの子弟の三分の一だが、ワシントンのカトリック・ユニヴァーシテイやジョージタウン大学、インデイアナのノートル・ダム大学、シカゴのロヨラ、ニューヨークのフォーダム、ボストン・カレジなど、名門大学も多い。

また教会に高額の献金をする熱心なプロテスタント諸派に比べて、カトリック信者は裕福な者でも献金の額が少なく、プロテスタント信者よりも宗教に醒めたプラグマテイックな態度をとっている者が多い.歴史と伝統の古さからくる一種の距離感を保っていて、むしろ多くの日本人と共通した感覚を持っているのもおもしろい。

アジアはどうかというと、日本の隣の国では、毎年10万人の成人洗礼が行われていて、これは世界一の数字だ。人口４、５００万人のうち約10パーセントがカトリック人口になろうとしている。北朝鮮でも金日成の外戚にキリスト教徒がいて、他国に先駆けてまずバチカンに食糧援助を求めてきたという情報もあった。現にドイツ・カトリックのベネデイクト修道会が２００床のカトリック病院を作っている。

またフィリッピンのような東南アジア地域にもカトリック的な視点が広く根をおろしていることはかなりよく知られている。日本のカトリック教会のセレモニーでも、地域

によってはたくさんのフイリッピン人が参加してコミュニテイを形作っている。ベトナムやカンボジアなどの旧フランス植民地の指導者やインテリたちの多くは、フランス系のミッションスクールの出身だ。そのせいで、仏教徒にとどまってはいてもカトリックの知識と教養を身につけた人が多い。

８００万人の隠れ信者を擁するという中国のカトリック組織は、共産主義政権に抵抗する地下組織の拠点の一つになっている。１９９７年10月に聖母マリアのモニュメントを立てようとして逮捕された中国人司教の安否は、欧米の政治家の注目の的になった。

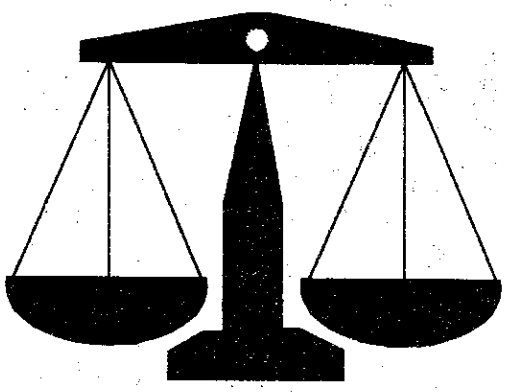
カトリックは単なる宗教組織ではなく、バチカンは独立国であり、国連にも加盟している。国土は４４ヘクタールで世界最少であるが、国境をこえて世界に９億の信者を有し、絶えず情報を発信し続けている。まさにネットワークを駆使した最先端の巨大なバーチャル国家という側面をもつ。経済的にも、宗教美術の遺産はもちろん、たとえば、フランスではパリのヴィクワール広場にあるケンゾーのブテイックの建物を初めとして、毎年１９０億フランにのぼる家賃収入をもたらす一等地のアパルトマンを所有しているように、世界中に財源をもった一大勢力である。

その頂点に立つローマ法王は、まさに超国家的、いや超宗教的な怪物だとさえ言えるだろう。実際、共産主義が崩壊した現在では、ローマ法王の関心は、異宗教間の対話であり、同じ旧約聖書に端を発した一神教であるユダヤ教、イスラム教との接近和解に向かっている。キリスト教仲間であるギリシャ正教やロシア正教、プロテスタントとの歩み寄りはいうまでもない。西暦 2000 年にこれらの宗派の代表者とともにシナイ山にのぼって新しい時代を祝おうというのが法王の願いであり、今、キリスト教国では２０００年に向けた確かな動きが始まっている。

ところが、おおかたの日本人にとっては、ローマ法王はあいかわらずメディアテイックな存在にとどまっている。政治家や財界人やインテリも一般にキリスト教に関する認識を欠いている。それどころか、カルト宗教によるテロ事件を経た後では、宗教一般をますます遠ざける傾向すらあるほどである。

一方、世界中で日本と関係の深い多くの国々の人にとっては、ローマ法王に対する認識というのは、単なる常識ではなくて、文化や精神の核に関っていることなのだ。日本が、かれらのその認識への洞察を正しくなし得るならば、『国際社会』での一挙一動の意味が違ってくることは疑いがないだろう。歴史や文化を見直す視野さえ開けてくるだろう。

いや、そればかりではない。 バチカンという国家が、歴史の波に現れて身につけた老練な知恵を駆使して世界の国際舞台でいかにふるまっているかを観察することは、日本の外交にも光を投げかけてくれる。その一例が謝罪外交である。」 p8-14。



3．北朝鮮とバチカンのつながり：「キリスト教と聖書の謎」
日本文芸社より

知られざるヴァチカンの光と影

Chapter 1.

〝ペテロ（岩）〟の上に建てられた〝墓所〟から始まったヴァチカンがいかなる変遷から〝独立国〟となったのか？その過程にある「政教協約（コンコルダート）」と富の発生とは？ここに、その〝豊かさ〟の暗部を衝く！

一九九六年ジュネーブ発の〝奇妙な記事〟から

一九九六年一月二十五日、新聞の国際面に小さな……しかし奇妙で重要な記事が載った。

それはジュネーブ発の時事電で、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）がローマ教皇庁＝ヴァチカンに対して食糧援助を求めてきたことを、教皇庁が明らかにした――というものだった。本文はわずか五行、たった五十七文字のベタ記事だ。見出しを含めても十行にも満たない。

ついうっかり見落としてしまいがちな記事だが、じつはとても重要な意味をもち、それは現代史の隠された一面を探査するための絶好の入口でもあるだろう。

周知のように北朝鮮は現在、国際社会のなかで孤立をかこっている国家であり、慢性的な農業生産不振に加えて、一九九五年の水害が追い討ちをかけたために、国民の食糧事情はきわめて危機的な状況にある。

しかも北朝鮮政府が援助を求めたローマ教皇庁は、冷戦構造時代には共産主義

体制に鋭く拮抗していた存在であった。〝赤い国〟ポーランドから誕生したローマ教皇――つまり共産主義国から初めて誕生した教皇であるヨハネ・パウロ二世を、かつてクレムリンは衛星国の秘密工作機関をフル稼働させて暗殺しようとした。

いくら時代が変わったとはいえ、北朝鮮がヴァチカンに食糧援助を求めるなどということは、これまではまるで考えられなかったことだ。

だが、旧ソ連や中国を除けば、共産主義国家といえども宗教に対しては比較的寛容な態度を示した場合が多い。北朝鮮もまたなぜか宗教に寛容なのだが、それは金日成の血脈と関係がある。

■孤立しながらも強烈なカリスマ性をもって治政していた金日成(右)の死により、実力未知数の息子・金正日(右)にバトンが渡った 今後の北朝鮮がどこに向かうかはいま誰にもわからない

■ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世の韓国訪問(1984年)。右は盧泰愚大統領(当時)

■板門店

金日成の外祖父にあたる康敦煜はクリスチャンの反日闘士であったとされるし、その康一族に連なる康永燮は朝鮮キリスト教徒連盟委員長の職にある。今回のヴァチカンに対する援助要求も、この康一族が水面下で工作を進めていたとされる。

興味深いのは、北緯三八度線を越えた南――つまり韓国でも、キリスト教が盛んなことだ。ソウルに泊まってホテルの窓から外を眺めると、いたるところに十字架が見える。最初は「なんと病院の多い街だろう」などと思ったのだが、それが教会を示すサインだとわかってさらに愕いた記憶がある。

北朝鮮とヴァチカンという不思議に思える組合わせも、裏側から見れば決しておかしなことではない

北におけるキリスト教徒の実態がどのようなものかは、残念ながら窺うことができない。けれども、ヴァチカンに連な

る情報ネットワークが作動して、一月二十五日の記事になったことは間違いないだろう。

イスラエルとPLOの和解によって中東和平がほんのわずかずつではあるが前進している現在、今度は「板門店を通って教皇が北を訪れる」などという計画が発表されるかもしれない。いや……ヴァチカンのことだ、すでに秘かに計画を練っている可能性だってある。もしもそれが実現すれば、カーター元米大統領の北朝鮮訪問以上に、世界に大きなインパクトを与えることになる。

それはともかく、一九九六年から世紀末にかけての世界は、ヴァチカンと北朝鮮がいつどのようにして繋がるのか――という視点から眺めてみるのも興ではあるまいか。

さて、北朝鮮が援助を求めたヴァチカン＝ローマ教皇庁とは、そもそも、どのような存在なのだろうか。

次期法王は誰か？

現法王は今相当弱っているようである。

「現法王に最も重用されている実力者は、保守派では１５年間教理省（昔の異端者審問に相当する教理の元締め）のトップにいる元ミュンヘン大司教ラッツイガー（ドイツ人）、進歩派ではミラノのマルティニ大司教（イタリア人）などがいる。マルティニ大司教はメデイアにもよく登場し、１１か国語を操る」「ローマ法王」竹下節子、191。

聖書協会連盟・UBSとカトリックの関係

現代訳聖書のギリシア語のテキストは、ＵＢＳのものを使用している。

その聖書協会連盟にカトリックが密に関与しているのである。

「教皇庁聖書研究所のカルロ・マルティニ枢機卿は、聖書協会連盟の編集委員の一人でもある。聖書協会連盟の副会長は、ナイジェリアの、オニツア枢機卿である。実行委員には、イタリアのアリロナ大司教が入っている」

「カルロ・マルティニ枢機卿は、次期法王の候補者二人のうちの一人と言われている」Gail Riplinger.

ローマの狙いには三つある：①再び世界を支配すること②迫害を復活すること③プロテスタントが行ったすべてのことを無効にすることである（大争闘下 321）。プロテスタントが打ちたてた大原則の一つは、「聖書、聖書のみ」である。「聖書のみ」というなら、信仰の基いとなるべきプロテスタントのその聖書を巧妙に変えて、土台を突き崩しているとは考えられないことであろうか。

注意：

ローマ・カトリックのことを研究する時にいつも覚えていたいのは、制度としてのローマ・カトリックの陰謀を暴くのであって、カトリックの中には多く神の民がいることである。ここにも二面がある。

１．「... 獣とその像を拝むことに対して宣告されている恐るべきさばき（黙示録 14:9-11）について知るとき、だれでもみな、獣の刻印とは何か、それを受けないようにするにはどうすればよいかということを学ぶために、熱心に預言を研究するようになるはずである」大争闘下３６０。
真のプロテスタントは、ローマ・カトリックを制度としての、サタンの一大傑作として嫌悪する。（大争闘上 44、大争闘 330、）。
そして、法王教の陰謀、悪を暴露するように我々は召されている。（牧師への証 117-118、大争闘下 328 参照）。

２．一方、バビロンに「多く」神の民がいることと（大争闘下 84、92、190、嵐が迫ってくるとき、「第三天使の使命を信じると告白しながら、真理に従うことによって清められていない、多くの信仰を捨てる者がいる」ことを覚えているべきである。 諸教会から、カトリックからも 5 時の働き人（マタイ 20:6）が、最後の大真理のために、自由のために我々よりももっと熱心に戦うと預言されている。（１８８８Material, 378）
彼らは与えられた光に忠実に従い、さらなる光を求めてバビロンにとりこになっている。
恐るべきローマの陰謀を知らせ、ただ神のみを拝するように三重の使命を何の曇りもなく、率直に伝える使命が我々に負わされている。「バビロンから出てきなさい」と。あまりにも多くの人が世界的な洗脳、「最も強力な欺瞞」のとりこになっている。

聖書、証しの書の誤解、曲解、歪曲
これが混乱、分裂をもたらす

1．主題に関する他のすべての聖句を無視し、１つの聖句だけを用いてはならない。 2．文脈を無視－問題の前後の節を無視してはならない。 3．歴史的、状況的背景を無視してはならない。

預言者の言った言葉の状況、背景を考慮しないで、またその文脈を無視して自分たちの意見を支持するために引用することがよくあるのである。

一例を挙げよう:

● １８８８年のエピソードに関して。

１８８８年のメッセージに関しては今も論議されている。わが教会はあの天からの尊い、後の雨-大いなる叫びをもたらすはずの信仰による義認のメッセージを拒んでしまって今日のありさまになっているのである。わが教会はチャンスを逸したのである。しかし、一般的な考えは、１８８８年の勝利説である。あの時勝利したことを擁護するために次のような引用文を引き抜いて用いたことがあった:

「我々はほとんど３年間戦った。しかしその時我が民の間に決定的な変化が起き、神の恵みによって<u>我々は決定的な勝利をおさめた</u>」Letter 40, 1893。

この分野の権威者であるD.K.ショートの言葉を引用してみよう：

「長年の間、Letter 40, 1893の完全な文は記録保管所にあったままで、上述の文だけが利用されたのである。しかし、１９８３年にこの手紙がManuscript Release#996として手に入るようになった。その全体の手紙は『主婦たちの大きな影響力』というもので、その文脈は次のように読まれた:

「あるキャンプミーティングで、チーズはキャンプで売られてはならないことが決定されていたが、ケロッグ博士は キャンプ場にやってきて驚いた。すでに食品部で売るために大量のチーズが買われていたのである。彼と数人の者はこの事に反対した。しかし、食品部の責任者は、某兄弟との同意の上で買ったのだと言った。ケロッグ博士はそのチーズの値段を聞いて、全部買い取ったのである。彼は原因から結果をたどり、健康そうにみえても、ある食べ物は非常に有害であることを知っていた。しかし、健康生活の問題を学んでいた者たちは、兄弟たちが正しい原則に反していることを知っ

て驚いた。このことがミネアポリス世界総会まで続いた。『我々はほとんど３年間戦った。しかしその時我が民の間に決定的な変化が起き、神の恵みによって我々は決定的な勝利をおさめた』Letter 40、1893。

上述の文は、１８８８年の総会でのことを言っていると解釈できないことは自明である。わが教会の歴史を拒み、悔い改めへの呼びかけを回避するためにこのような絶望的な戦術が用いられるのである」１８８８の謎 115、6 。

聖書にも、証しの書にも矛盾のように見える文が多くある。しかし、神のみ言葉、聖書には決して矛盾はない。完全な調和があるのである。

例を少し挙げてみよう:

●イザヤ１１:7 には「雌牛と熊とは食い物を共にし、牛の子と熊の子と共に伏し、ししは牛のようにわらを食い」とあるが、イザヤ３５:９には「そこには、ししはおらず、飢えた獣も、その道にのぼることはなく、その所でこれに会うことはない。ただ、あがなわれた者のみ、そこを歩む」とある。両方とも新天地の描写である。獅子はいるのか、いないのか。

もちろん、飢えた獰猛な獅子はいないということである。

●出エジプト４:２１「わたし（主）が彼（パロ）の心をかたくなにする」（7:3, 8:15, 32, 9:34, 35,）と書いているかと思うと、1サムエル6:6 には「なにゆえ、あなたがたはエジプトびととパロがその心をかたくなにしたように、自分の心をかたくなにするのか。神が彼らを悩ましたので、彼らは民を行かせ、民は去ったではないか」とある（出エジプト 9:12, 10:1, 20, 27, 11:10, 14:4, 8, 17)。

● サムエル記上 17:50 には「こうしてダビデは石投げと石をもってペリシテびとに勝ち、ペリシテびと（ゴリアテのこと）を撃って、これを殺した」とあるが、
サムエル記下 21:19 には「ここにまたゴブで、ペリシテびととの戦いがあったが、そこではベツレヘムびとヤレオレギムの子エルハナンは、ガテびとゴリアテを殺した。そのやりの柄は機の巻棒のようであった」とある。

この矛盾は、1928、9年ごろに大きな論争になったようである。欽定訳、文語体、新改訳では「エルハナンはゴリアテの弟を殺した」とある。聖書の写本、翻訳の問題は大きな問題なのであるが、ここで論ずるわけにはいかない。
エルハナンはゴリアテの兄弟を殺した（1歴代 20：5）のであって、ゴリアテを殺したのはダビデである。

聖書の翻訳に混乱がある時は、他の聖句と比較したり、現代の預言者に聞くといい。人類のあけぼの下 324～338 にはダビデがゴリアテを殺したことがはっきり記されている。

聖書を正しく理解するためには、聖書全体に散らばっている真理を探り出し、集めなければならない。

● イザヤ書28:10にその原則を見る。

「それは教訓に教訓、教訓に教訓、規則に規則、規則に規則。ここにも少し、そこにも少し教えるのだ」。[口語訳]
文語体では「戒めに戒めをくわえ戒めに戒めをくわえ　のりにのりを加え　此処にもすこしく彼処にもすこしく教ふ」となっている。
欽定訳では「precept must be upon precept(教訓に教訓)、line upon line 教訓(一行に一行)」となっている。

神の僕、ホワイト夫人 はイザヤ28:10を引用して次のように言っている：

> 「我々は大きな全体を構成しているところの数々の真理を、『ここにも少し、そこにも少し』探しだし集めなければならない」教育 132。

ちなみに新共同約聖書でここを見てみよう：

イザヤ書 28:10 「ツァウ・ラ・ツァウ、ツァウ・ラ・ツァウ（命令に命令、命令に命令）カウ・ラ・カウ、カウ・ラ・カウ（規則に規則、規則に規則）しばらくはここ、しばらくはあそこ」と彼らは言う。

英語訳の最も人気を得つつある聖書,NIV（新国際訳）では、このところを注解して、預言者のふざけた物まねであろうとしている。ホワイト夫人は、この聖句を聖書解釈の一大原則としている。

ついでだが、これも聖書解釈の一大原則であるから触れておこう。

● イザヤ 8:19、20は 口語訳聖書では「 人々があなたがたにむかって『さえずるように、ささやくように語る巫子および魔術者に求めよ』という時、民は自分たちの神に求むべきではないか。生ける者のために死んだ者に求めるであろうか。
ただ教とあかしとに求めよ。まことに彼らはこの言葉によって語るが、そこには夜明けがない」となっている。

新共同訳では「人々は必ずあなたたちに言う。『ささやきつぶやく口寄せや、霊媒に伺いを立てよ。民は、命ある者のために、死者によって、自分の神に伺いを立てるべきではないか』と。そして、教えと証しの書についてはなおのこと、『このような言葉にまじないの力はない』と言うであろう」となっている。

預言者、ホワイト夫人は聖書解釈の原則としてこの聖句を新共同訳で使われるだろうか？

欽定訳では「おきてと証に求めよ。もし彼らがこの言葉にかなって語っていなければ、それは彼らの内に光がないからである」となっている。

霊感の言葉を、聖書的な解釈の原則に従わずに、一部だけを取って自分の意のままに解釈するために多くの人にキリスト教を誤解させ、つまづきの原因を与えているのである。何百というキリスト教派が出来上がった由縁でもある。エジプトのカエルの災いのように増えるであろう。

「われわれは、よろこんでおのれをむなしくするときにのみ天の光を受けることができる。われわれは、すべての思いをとりこにしてキリストに従わせることに同意しない限り、神のご品性を認識することも、信仰によってキリストを受け入れることもできない。これをなすものにはすべて、聖霊が無制限に与えられる。」１希望２１４。

「この若い役人と同じように、高い信任の地位にあって、大きな財産をもっている人々にとっては、キリストに従うためにすべてを放棄することは犠牲が大きすぎるように思えるかもしれない。しかしこれはキリストの弟子になりたいと望むすべての人の行為の原則である。服従に欠けるものは何も受け入れられない。自我を屈伏させることがキリストの教えの本質である。」２希望３３３。

編集後記

アンカー誌の発行が遅れて申し訳ございません。仕事を効率的にしようと考え、コンピュータの環境を整えるために時間がかかりました。忍耐を学ばされます。

アンカー誌にいろいろ反応があります。はっきり言ってくださる方には感謝します。

間接的に聞くのが多いのですが、アンカーは警告、時の切迫などをとりあげ、内容が暗く、脅かし的であると評される方があるかと思うと、預言の時の説き方は非聖書的、非証の書的であるとか、また実に時にかなったメッセージであるとか、いろいろです。

アンカー誌の目指しているところは、憐れみの警告とすばらしい希望を提示することです。ある時には片面が強調される時があるとは思いますが、他の面を強調しないというのではありません。ホワイト夫人は、キリストへの道に至聖所のこと、日曜休業令のことに一切触れていないからと言って、大争闘のメッセージを軽視しておられるのではありませんでした。彼女は、他のどの本よりも、各時代の大争闘の本を「秋の木の葉のように」散らしなさいと言われました。

アンカー誌のある号で、ある点が強調される時に、他の面をおろそかにしているとお考えにならないでください。

目前に迫る嵐に悔いのない備えをしましょう。

ビデオ：

● **「アルプスのイスラエル」** LLTプロダクション制作、日本語版　3，000円

専門的証拠資料に基づいて作製された、ほとんど忘れられたワルデンセスの歴史！幾千年にもわたる苦難の中に神の言葉を守りとおした驚くべき物語。彼らの譲り受けた信仰、生き方、教育、伝道。アルプスの山々を背景にした美しい画像。

● **獣のしるし－６６６」** ジェームス・アラビート　3,000円

LLTプロダクション制作、

ローマ・カトリックと古代バビロンの異教のシンボルを比較。世界の大聖堂、彫刻、その教え、習慣はどこから来たかを暴露する。

● **「どの聖書？」「WHICH BIBLE」** ジョー・マニスカルコ 104分　3,000円

第１部－ワルデンセスから欽定訳聖書、再臨運動までの純粋な聖書の流れ。

第２部－使徒たち以来、どのように聖書が改悪されたか、現代の聖書翻訳にいつ、何が起こったか。改悪聖書の流れ。

書籍：

● 『ＮＯＷ、今』メリイケイ・マックリオド著　植田 正志訳　100円

日曜休業令が出た時を想定して神の民に起こり得ることを書き下したストーリー。

● 『アピール』ルーター・ワーレン。　100円

十字架のイエスの苦痛はまだ終わっていない！青年会(MV)を最初に組織した人。彼を情熱の説教者にした動機は何であったか。

● 『隠された戦い』デビッド・Ａ・ミラー著　砂川 満訳　1,000円

ダニエル、黙示録を、ＳＤＡの教理を盛り込みながらわかりやすく解説。世界をコントロールしている本当の力とは何か？

● 「預言の謎と新世界秩序」 デビッド・ミラー著 砂川 満訳　830円

ダニエル、黙示録を分かりやすく初心者向きに解説。

伝道用トラクト：

● 聖書による「安息日問答」　50円

聖書のみによって質問に答える、説得力のあるトラクト。

● 「食事と健康」ミニストリー・オブ・ヒーリングより抜粋　50円

この印刷物は信徒の皆様の祈りと自由献金によって続けられています。

送金には郵便振替をご利用ください。

振替口座番号は下記の通りです。

０２０８０－０－１２１２１　サンライズ・ミニストリー

住所：〒905-0428　沖縄県国頭郡今帰仁村今泊1471

サンライズ・ミニストリー出版部　金城重博

皆様のご意見、ご感想などをお待ちしております。

ＴＥＬ：0980-56-2783　FAX：0980-56-2881　Email:anchor@cosmos.ne.jp